

『曾根崎心中』の恋（中）

吉田真樹

本論文は、『曾根崎心中』の倫理的意義を明らかにするために本質論的な考察を行うものである。前稿^①では、「生玉社の場」前半について概括的に押さえるところまで進んだ。本稿では、「生玉社の場」前半に残された問題を改めてくわしく取り上げることから始めたい。それは「心の嘘／心の本当」とでも呼ぶべき問題である。

本稿の議論の背景には、倫理学・日本倫理思想史における和辻哲郎と相良亨による清明心・正直・誠の研究があり、近くは清水正之による偽りの研究がある^②。そこから着想したということではないが、本稿も結果的にそれらの研究に連なる部分があるう。「まこと」への注目は、日本の倫理思想史全体に何らかの基軸を見出そうとする際の常套的な方法となっている。

また、あくまで部分的にだが、本稿に最も近い考察とみなせる先行研究として、美学者青木孝夫による「〈契り〉の美学——『曾根崎心中』に即して——」^③の「第二章 二つの「まこと（真理）観」があ

る。

青木論文はそのタイトルに反し、『曾根崎心中』の詳細は熟知のものとして叙述する」（二七頁）という立場から、『曾根崎心中』の具体的な内容を取り扱わず、一貫して「約束」と「契り」の構造・本質に関して抽象的な議論のみを行っている。青木論文の結論を本稿なりにごく簡単にまとめるならば、「約束」は人為的なものとして時間的限定をもち、信賴関係を前提とする有限なものである。「誠」は「約束」の次元に属する。これに対して、「契り」は超自然的に始まり、終わりをもたない絶対的合一であり、信賴関係を生み出す母胎としての特種な約束、永遠の約束である。『曾根崎心中』は「契り」を表現した作品である、となる。

青木の行論中、第二章では前提的な議論として、言表内容としての「まこと」を「真」、言表主体の「まこと」を「信または誠」と区別する（五頁）。これは徳兵衛の「正直の心の底の涼しさ」が、「知性の組織した合理的言葉の体系と事象との照合に拠る論証……

ではなく、それを主張する者の心の明らかさ即ち嘘・偽りのないことが証明されれば、心と言葉の一致が保証され、かくて言葉による事象の把握の正しさも保証される」(三頁)ことを狙ったものだったということの言い換えである。

青木による「真」と「信または誠」との区別は、本稿の表現でいえば、「言葉の本_レ当」と「心の本_レ当」に類する区別である。本稿では、お初・徳兵衛の間の「言葉の本_レ当」と、それ以外における「言葉の本_レ当」をさらに区別して、「心の本_レ当」を追い求める『曾根崎心中』のより複雑な実態に迫りたい。

五 心の中——「生玉社の場」の解釈②

身に迫る親族断絶・大坂追放は、徳兵衛にとって、ただお初と逢えなくなることを意味していた。徳兵衛はお初にいった。

わが身に離れ、どうせう^④。(二三頁。傍点吉田、以下同じ。)

「お前と離れ、どうしよう」。「どうせう」というどん詰まりの言葉が、徳兵衛が心の底からお初を想っていることを証している。前節で述べたように、徳兵衛のこの心のありようは性格に起因するものではない。徳兵衛が粹がついていた段階から、恋ゆえに粹を破綻させた段階へと至ったことに起因するものと捉えなければならぬ。むせび泣く徳兵衛の涙は、粹を破綻させた本_レ当の涙であった。した

がつて、徳兵衛は本_レ当の男であったことになる。

これに対して、先立って描かれたお初の涙は、本_レ当の涙であっただろうか。改めてこう問うことは、第三節で述べた「嘘／本_レ当」問題に直接関わる重要な問いである。お初が遊女であると判明するのがこの「生玉社の場」である以上、本稿としてはここで改めて、お初の心のありように疑いを差し挟んでおかねばならないのである。なぜならば、遊女の言葉(表現)と、その「心の中」との間には乖離があると一般に考えられるからである。

「生玉社の場」冒頭に戻って改めて考えよう。お初に呼び止められ、編み笠を脱ごうとする徳兵衛に対して、お初は次のようにいていた。

ア、まづやはり着てゐさんせ。今日は田舎の客で、……戻つて見ればむつかしい。駕籠もみな知らんした衆。やつぱり笠を着てゐさんせ。(二九―二〇頁)

編み笠を脱ごうとする徳兵衛をお初は制した。その理由は田舎客や駕籠かきに知られては面倒だからというものであった。注意すべきは、ここには紛れもなく、お初が遊女として振る舞う上での嘘_レ性の自覚が認められることである。お初は、廓の外にいた徳兵衛をも、自分の商売上の嘘_レ性に付き合わせようとしたのである。

お初と田舎客とは廓からの出張(同伴)営業中にあるため、廓内

と同じ関係が廓外でも維持されているに違いない。営業中という意味で擬似廓内にあるお初と、廓外即ち人倫内において健全に仕事をしている徳兵衛とは、本来ならば交流というものが成り立つはずのない状況にある。しかしお初は、親しきだけを根拠に、自身の商売上の嘘性に合わせてほしいと徳兵衛にせがんでいるのである。お初はあくまで廓内に軸足を置きながら、廓内でそうあったはずのお初と徳兵衛との親密さを、廓外でも要求したことになる。これをどう評価すればよいだろうか。

続く箇所のお初の言葉は、それはそれとして、という形で、嘘性から本、当、性の話に切り替えようとするものだった。しかし、お初は本、当、に、本、当、性の話をしているのだろうか。

それはさうぢやが、この頃は梨も礫も打たんせぬ。氣遣ひなれど、内方の首尾を知らねば、便宜もならず。丹波屋まではお百度ほど尋ねれど、あそこへも訪れもないとある。ハア誰やらが、オ、それよ。座頭の大市が友達衆に聞けば、在所へ行かんしたと言へども、つんとまことにならず。(二〇頁)

徳兵衛が音信不通となってお初は心配し、様々に情報を集めようとしたが、とんと本、当、のところにたどり着けなかった。本当にひどいあなた、とお初は続ける。

ほんにまたあんまりな。わしはどうならうとも、聞きたうもな

いかいの。こな様それでも済もぞいの。わしは病になるわいの。

(二〇頁)

私がどうなつても聞きたないんかな。お前さまは知らんぷりで済むだろうけど、私は病気になるてしまうわ。

嘘、の恋を本、当、の恋らしく売るのが遊女であるという観点からすれば、ここまでの範囲では、観客（読者）は単にお初の技術としての恋を見せられているにすぎないととれてしまうところである。大筋で「あなただけを想っていた」とお初はいうわけだが、これは通常、遊女の営業トークにすぎないものである。田舎客への対応を見ればよくわかるだろう。観客（読者）から見れば、この段階ではお初がどのような女であるのかはまだはっきりとしておらず、ただ手練手管の遊女にうぶな男客が誑かされているとも見える場面となっている。⁽⁵⁾一文一文をたどってみると、お初の言葉が嘘なのか本当なのか、そのどちらともとれるように、意図的な際どさをもって書かれていることがよくわかってくる。

う、そならこれ、この瘡^{つかへ}を見さんせと、手を取つて、懷のうち恨みたる口説き泣き、ほんの、女夫^{めをと}に変らじな。男も泣いて、……(二〇頁)

嘘、だと思ふならばこの胸のつかえをござんなさい、とお初は徳兵衛の手を自分の「懷のうち」に入れ、⁽⁶⁾涙を流す。胸のつかえは本、当、で

す、これが私の言葉が本[、]当である証拠ですとお初はいうのである。しかし、ここまででもまだ、お初の涙が遊女としての高度な営業活動にすぎないものとれる余地が残る。

ところが、右引用末尾の「ほんの、女夫に変らじな。」という近松（語り手）の言葉によって、事態は疑いを入れぬものへと一変する。二人主人公の外側からする特権的な言葉によって、お初の涙は、本[、]当の涙としてしか解釈できないものとして確定される。またそれと同時に、これまでのお初の徳兵衛に対する言葉のすべてが、本[、]当の言葉であったことが保証されることになるのである。

観客（読者）はここに来てやっと、我々は遊女お初を疑わなくてよいのだと、近松（語り手）の言葉に導かれて安心を得る。「観音めぐり」で提示されていた「祈る女、恋う女」としてのお初のありようが、本[、]当の女であったればこそそのものとして、ここで一つに像を結び、観客（読者）の腑に落ちるように書かれているのである。

徳兵衛に見せるお初の涙は、徳兵衛の涙と同様に、本[、]当の涙であることが確証された。涙が嘘であるか本[、]当であるかということが問題にされるということは、「心の中」が容易に窺えないものとして、それとして問われる事態に至っているということを表している。遊女・廓の前提としての嘘[、]が、必然的に「心の中」そのものを問わしめるに至っているのである。⁽⁷⁾

六 心の本[、]当——「生玉社の場」の解釈③

『曾根崎心中』は、廓内でのお初と徳兵衛の関係について全く描いていない。しかし近松の筆法⁽⁸⁾からいえば、廓内での二人の関係と、「生玉社の場」での二人の関係とは、少しも変わりがなかったと判断できる。廓内の二人にはもちろん強固な関係、即ち揺るがぬ親密さがあつたと示唆されているのである。

二人の間には廓の内外に関わらぬ確かな絆が結ばれていた。お初にとってこれが特別な関係であることは、田舎客とお初の関係との対比においてすでに明示されていた。他方、徳兵衛は廓外にいるお初に対して、廓内におけるのと少しも変わらぬ態度で接していた。つまり徳兵衛にとっては、廓にいろいろが廓にいまいが、もはやお初はお初なのであつた。お初にとっても徳兵衛にとっても、このありようは決して当たり前のものではない。

不粹な徳兵衛が、お初がお初であることを成り立たせる。徳兵衛はここにただ本[、]当のお初がいると確信している。恋する徳兵衛は觀念において、お初を規定する桎梏としての廓を消し去ることができてしまっている。そして、本[、]当のお初を発見することができてしまっている。したがって恋する徳兵衛にして初めて、お初を本[、]当のお初たらしめることができたことになる。徳兵衛は觀念において本[、]当のお初がいられる場所を作り出し、その同じ場所こそが本[、]当の自分がいるべき場所であると確信するのである。

徳兵衛はそもそも粹のため、たしなみとしての恋を求めて、廓に足を踏み入れたはずだった。しかしお初と出会い、嘘[、]を前提とする

廓の内に本^{ほん}当^{とう}の女を見出してしまった。そしてそれと同時に、粹^{じゆん}を忘れ、本^{ほん}当^{とう}しかない男になってしまった。

一般に廓の客が遊女への恋に浮かれながら人倫に戻ることは、觀念において自由である。客に「自分は恋をしている」と思い込ませるこ^こうしたありようこそが、廓が提供すべき粹^{じゆん}の本体であろう。客は恋の陶醉が失われれば、また廓を訪ねればよい。

これに対して徳兵衛は、お初を恋するあまり廓での二^{ふた}人^{にん}のありようを、廓外に無自覚^{むじかく}にもち出してしまっているのである。徳兵衛はいわばうぶなまま熟達せず、本^{ほん}当^{とう}の恋によって人倫から逸脱^{いつだつ}しかかったままと^なった廓客であつた。恋への没入からくる逸脱感^{いつだつかん}は、通常ならば「廓の狙い通りに熱くなつてしまつたよ、危ない危ない」などと、客は自覚し自己修正しながら楽しむべきものであるはずだろう。客は粹^{じゆん}であろうとする限り、諦めをもち、バランスを保ちながら遊ばなければならぬのだが、徳兵衛は粹^{じゆん}になり切れず、秩序を乗り越える者となつたわけである。

ではそれに対し、お初はどうだろうか。第五節の最後に引いた「うそならこれ、この痞^{つかへ}を見さんせ……」以下に続き、お初に責められた徳兵衛は苦勞話を語り始める⁽⁹⁾。「言うて苦にさせ、何せうぞいの、此中おれが憂き苦勞……」(二〇頁)と、お初への思いやりのために、これまで話さなかつたのだ云々と徳兵衛が冗談めかしいうと、お初は、

それほどにない事をさへ、わしにはなぜに言はんせぬ・隠さんしたは訳がある。なぜうち明けてはくだんせぬ(二二頁)

といつてさめざめと涙を流す。お初は些細なことでも「うち明け」合う關係を望んでいた。この涙の本^{ほん}当^{とう}性^{せい}は近松が特権的に保証している。もはやお初にも、廓内での徳兵衛との恋が本^{ほん}当^{とう}になつてしまつており、廓の内外を度外視して徳兵衛のことを考えるようになってい^いることが見てとれる。お初は徳兵衛に関して本^{ほん}当^{とう}になつてしまつたのである。

一般に遊女が心の外で商売を行い、心の中では男を想うスタイルを確立していたとしても、それは觀念としては自由である。しかし、嘘^{うそ}の女であるべき遊女のお初が、現実に廓の外、即ち人倫に出て徳兵衛と結ばれる可能性はほばない。二人が現実に逢うことは、廓内でのみ、あくまで遊女と客としてのみ許される事柄であつた。廓でしか結ばれようがないのにも関わらず、人倫の反世界としての廓が二人を隔てる。本^{ほん}当^{とう}の恋によつて、お初は嘘^{うそ}の女としての遊女から逸脱し、嘘^{うそ}の恋を捨てて本^{ほん}当^{とう}の女になろうとしていたのである。

七 言葉の本^{ほん}当^{とう}——「生玉社の場」の解釈⁽⁴⁾

前節・前々節では『曾根崎心中』において「心の中」が問題化され、その嘘^{うそ}性^{せい}・本^{ほん}当^{とう}性^{せい}が問われるさまを見てきた。以上をふまえながら、本節では前稿から引き続いて徳兵衛の転落⁽¹⁾の問題について考

える。

「生玉社の場」前半の「心の嘘／本当」という問題の延長上に、「生玉社の場」後半において「言葉の本／嘘」という問題が加わる。この問題が徳兵衛の第二段階の転落に深く関わってくる。徳兵衛の言葉は、恋する二人の間においては本、当、であつたといつてよかつた。その上でさらに、徳兵衛の言葉の本、当、性というものが、二人の外側の視点、即ち「事実」の視点から問い直されてゆくことになるのである。

徳兵衛の転落の第一段階については前稿第四節ですでに述べた。徳兵衛からすれば、叔父に親族断絶・大坂追放を言い渡されたことは、お初との恋を守り通すために不可避の帰結であつた。他方、叔父・継母からすれば、家即ち人倫を守り通すために良かれと思つてした最善の提案が破棄されたのだから、人倫を破壊しようとする徳兵衛に、叔父が親族断絶・大坂追放を言い渡すこともまた不可避の帰結であつた。恋の思想と人倫の思想とが激しく衝突し、もの別れたことになる。⁽¹²⁾

転落の第二段階に目を転じよう。前節で触れた徳兵衛の苦労話は、テキストに即せば全てがただ徳兵衛の一人語りであり、徳兵衛の言葉以外の裏付けがとれないものとなつていた。⁽¹³⁾ お初が遊女である限りにおいて疑われた前々節の問題と類似の問題が徳兵衛においても生じているわけである。

徳兵衛は本、当、のことを言っているのか、嘘、をついてはいないか。どこまでも言葉以外に証拠のない一人語りであることが、改めてそ

のような疑念を差し挟ませる。むしろこの場面は、そのような疑念を抱かせるべく、意図的に構築されているといつてよいだろう。そして、「生玉社の場」では結局、何一つ確かなものは示されない。⁽¹⁴⁾

本稿第五節で見たように、観客（読者）はお初の言動が信用できるものか否かについて、一時判断不能の宙づり状態にされていた。今度は徳兵衛に対して、改めて疑念が抱かれうる余地が生じてきたのである。観客（読者）は再び判断不能の宙づり状態に置かれてしまう。⁽¹⁵⁾

徳兵衛の「言葉の本、当、性／嘘、性」という問題に大きく焦点が当てられるのは、「生玉社の場」後半の九平次登場以降である。

徳兵衛は親友ないし本、当、の友（兄弟同事の友達）（二四頁）と信じた九平次に、命懸けの金を全て貸した上にだまし取られた。九平次のやり口は、情報操作によつて徳兵衛の言葉の信用性（即ち本、当、性）を奪うというものだった。

九平次は印判を紛失したと御町衆（町役人）に届け出ながら、その印判によつて金の借用書に判をついた。印判は信用性そのものを意味するものであるから、九平次は本、当、とは何かという通念に揺さぶりをかけたことになる。この九平次の印判の企みが成功するのは、九平次の言葉が、御町衆への届け出によつて、また遺失物探索の張り紙や意図的な御町衆との社交によつて、裏付けをもち、流布し定着させられていたからである。さらにいえば、徳兵衛は九平次以外に「友達」をもたず、また、叔父・叔母・継母のような、五倫その

ものより少し距離があつて、切り離したり切り離されたりしうる間柄しかもたなかつたため、人倫（社会）的に浮いた存在だったからである。

具体的に見よう。徳兵衛が往来で九平次を見つけ、その腕をつかむと、粗相をするなど振り払われた。その後、二人が言葉のみで応酬する箇所を引く。

「イヤこの徳兵衛は粗相はせぬ。後の月の二十八日、銀子二貫目時貸しに、この三日限に貸したる銀、それを返せといふこと」
（二五頁）

徳兵衛の言葉は、この段階では本¹⁵当のように見えるが、九平次の一言ですぐにひっくり返される。

と、言はせもはてず、九平次かつらくと笑ひ。「気が違ふたか徳兵衛、汝と数年語れども、一銭借つた覚えもなし。聊爾なことを言ひかけ、後悔するな」と振り放せば、連れも笠をはらりと脱ぐ。徳兵衛、はつと色を変え、（二五頁）

徳兵衛の言葉を半ば遮るように、全く話にならないと九平次は余裕の態度を見せる。徳兵衛の言葉と九平次の言葉はすでに、対等の意義をもっていない。連れは九平次の言葉を本¹⁶当のものと捉え、徳兵

衛の言葉を嘘だと確信し、臨戦態勢に入っている。徳兵衛もそのことを瞬時に察知した。

「言ふなく九平次、身がこのたび大難儀、どうもならぬ銀なれども、晦日たつた一日で、身代立たぬと嘆いた故、日ごろ語るはこゝらと思ひ、男づくで貸したぞよ。手形もいらぬと言うたれば、念のためぢや、判をせうと、身どもに証文書かせ、おぬしが押した判がある、さう言ふな九平次」と、血眼になつて責めかくる。（二五―二六頁）

徳兵衛はより詳しく訴えている。一気に追い詰められて「血眼」になった、怒りと悲しみの真実味をもつてしても、徳兵衛の言葉はもはや本¹⁷当の言葉に返り咲くことはなかった。徳兵衛は打擲された。

徳兵衛の言葉には裏付けが欠けていたのである。徳兵衛の主張する金の貸し借りは、徳兵衛・九平次の二人の間のみに閉じられたものだった。通常は、借用書が外なる物として、貸し借りの開かれた証拠となるはずだが、ここでは九平次がその法的根拠を予め奪い、むしろ反証たらしめたのである。¹⁸

引用箇所直前の場面で、お初が徳兵衛の打ち明け話を聞いてはいた。しかしそのことは、徳兵衛の言葉の本¹⁹当さについて何らの裏付けを与えるものではない。お初が徳兵衛の一人語りを聞いたというだけのことだからである。また、そもそもお初は人倫内の存在ではないため、人倫において徳兵衛の言葉に裏付けを与えることはでき

ない。お初は無力にも田舎客に連れられて退場するほかなかった。そして、「生玉社の場」末尾に至っては、無関係であった往來の人も含めた全ての人々が、徳兵衛の言葉に疑念を抱いているのである。

九平次との言葉の応酬において、徳兵衛の言葉は、信頼性（本性）を剥奪されてしまった。このことは、徳兵衛がこれまでお初に語ってきた言葉の信頼性（本性）をも浸食せずにおかない。お初はどう思っているのか。言葉の応酬と暴力による圧伏の中、近松（語り手）が先に特権的に擁護してくれたはずの言葉（第五節引用「ほんの、女夫に変わらじな。」二〇頁）すら、効力を失ってゆくかのように見えてくる。徳兵衛の言葉が信頼性（本性）を失っていくのにつれて、近松（語り手）の特権的な擁護の回数も減っていくのである。観客（読者）は近松（語り手）にすら疑念を向けることができるようになる。

特権的な擁護の他の例として、九平次の長台詞を受けながらの「……と、手形を顔へ打ちつけ、はつたと睨む顔付きは、けんにも、なげに、しら／＼し。」（二六頁）というものがあるにはあるが、問題なのは前例と同様に、特権的な言葉それ自体が言葉の根拠になってしまっている点である。いいかえれば、この特権的な言葉は、文脈から遊離しており、丸ごと取り除くことさえできてしまうということである。

いったんこれを取り除いてみると、徳兵衛の言葉の本性とは、お初がただ一人愚かにも、根拠なく信じ込んだことによるもの

にすぎなかったのではないかという疑念が生じる（愚かとは人倫から見た非人倫的振る舞いを指す）。あるいはそもそも、徳兵衛の言葉は本性などではなかったのではないか、嘘だったのではないか、という疑念が拭えなくなってくるのである。

徳兵衛の孤立ないし一人語りが醸成するこの疑念が、徳兵衛の転落の第二段階の核となる。転落の第二段階とは、単に九平次が外からもたらしたものではなく、徳兵衛の内にその要因を求めうるものであった。九平次はそこにつけ込んだままであった。

お初は商人徳兵衛の言葉を信じるしかない。信じなければ、お初との間にあった恋の言葉までもが、嘘へとひっくり返ってしまうからである。

注

（１）前稿とは、吉田真樹『曾根崎心中』の恋（上）（『パラゴネ』七、青山学院大学比較芸術学会、令和二年）を指す。なお、前稿より執筆時期の早い、「近世芸能と和辻思想史―阿弥陀の胸割」と『曾根崎心中』を中心に―（木村純二・吉田真樹編『和辻哲郎の人文学』、ナカニシヤ出版、令和三年）があり、その中では『曾根崎心中』の仏教性に焦点を当てている。

（２）和辻哲郎『日本倫理思想史』（岩波文庫版（一）～（四）、平成二十三年（二十四年）、相良亭『誠実と日本人』（ぺりかん社、平成二年）他、清水正之『国学の他者像―誠実と虚偽』（ぺりかん社、平成十七年）。

（３）『比較文化研究』一三、平成二年。なお、前稿注（一）で少し触れたが、全体として青木が近松の思想研究における最も明晰な論者であるとの評価に変わりはない。

（４）『曾根崎心中』の引用は、山根為男校注の新編日本古典文学全集本

『近松門左衛門集②』小学館、平成十年所収）に拠る。詳しくは前稿注（13）参照。台詞の箇所「」を付す場合がある。

（5） うぶな観客（読者）ならば、恋を担う遊女はこのように恋の言葉を操るのかと感銘を受けることができる場面でもある。

（6） 癪を起こした場合の治療としての手当てを基礎としつつも、肌に触れさせて／触れられて安心するという行為であろう。技術としての恋であれば、肌に触れさせて相手を誑かすものとなる。類似的表現は、後の浄瑠璃作品（『相模入道千匹犬』正徳四年（一七一四）や、歌舞伎作品（『女鳴神』元禄九年（一六九六）、『桜姫東文章』文化十四年（一八一七）、『十六夜清心』安政六年（一八五九））にも見られる。

（7） 『出世景清』によって、古浄瑠璃から一線を画して以降の近松作品の特徴として、心の特立があることは周知の通りである。

（8） 近松の筆法では、常に過去を引きずった現在を描き、過去は登場人物が語る話の中だけにある。「生玉社の場」では、徳兵衛とお初の出会いの場面、徳兵衛から九平次が金をだましとった場面を描かない。

（9） 自覚的にお初を人倫に引き出したのであれば、お初が今後廓内で売ることができると恋の総量を買切ることが必要であり、莫大な対価を伴った身請けになる。

（10） 徳兵衛はお初に対して「ハアテ泣きやんな、恨みやるな、隠すではなけれども、言うても埒の明かぬこと。」（二二頁）と釈明する。徳兵衛の身に降りかかった叔父・継母による勝手な祝言話とその後始末は、不粹そのものであり、徳兵衛は単に人倫の問題として処理しなかったという含意がある。いわなかった限りにお初は、性がお初との恋の世界として徳兵衛の自意識としては、恋の話ではない些事をお初との恋の世界として確保された廓にもち込みたくなかったということであろう。徳兵衛は粹人ぶっているが、自身の根本的な不粹さにはまだ気付いていない。

（11） 前稿から用いている「転落」概念は、基本的には人倫側における転落を意味するものだが、ここでは説経節での転落＝転落の行き着く果てに、

成仏・栄華までもが想定され得る転落——との接続をも念頭に置きながら用いている。吉田真樹「近世庶民仏教思想と和辻思想史図式の捉え直し（下I）」説経『刈萱』を中心に（『思想史研究』一七、平成二十五年）、「同（下II）」説経『刈萱』を中心に②（同二二、平成二十七年）、平田篤胤「霊魂のゆくえ」（講談社学術文庫版、平成二十九年）第四章も参照。

（12） 義理と人情という解釈図式においては、人情の語に超越の契機が欠けているため、恋の思想を十分に説明できない。前稿注（9）において、倫理思想の思想類型として、「人倫の思想」と「超越の思想」とを両極とし、その中間に「実存の思想」を想定しているとした。恋は「人倫」に関わり「超越」にも関わりつつ、それぞれから外れる面ももつ。したがって、恋の思想は分類するならば「実存の思想」ということになる。ただし、『曾根崎心中』の恋は、一人ではなく二人の実存を問題にする思想であるため、西欧の実存思想とは区別される。

（13） ただし、徳兵衛の言葉が涙に始まり、涙に終わっていたことには注意を要する。「男も泣いて、オ、道理／＼。さりながら、言うて苦にさせ、何せうぞいの。……わが身に離れ、どうせうと、むせび、入つてぞ泣きゐたる。」（二〇～二三頁）

（14） 近松の特権的な言葉による擁護や非難を探すと、「生玉社の場」には以下の三つしかない。

・九平次の顔付きについて…「手形を顔へ打ちつけ、はつたと睨む顔付きは、けんによも、なげに、しら／＼し。」（二六頁）

・徳兵衛の打擲になすすべのないお初の様子について…「せんかたなくもあはれなり。」（二七頁）

・徳兵衛が打擲され無念の弁明をする様子について…「道理とも笑止とも、思ひ、やられてあはれなり。」（二八頁）

（15） もちろん、徳兵衛とお初の当人同士にあっては、互いを信じ切っているとみられる以下の描写がある。「おはつも、共にせく涙、力をつけて、

おし止め・さて／＼いかいご苦労。みなわし故と存ずれば、嬉し悲しう、忝し、……どうしてなりとも置く分は、わしが心にあることなり。逢ふに逢はれぬその時は、この世ばかりの約束か。さうした例のないではなし。死ぬるを高の死出の山、三途の川は堰く人も、堰かる、人もあるまいと、氣強う勇む言葉の中、涙にむせて、言ひさせり。」(二四頁)

しかしこの場面もまた、観客(読者)の疑念を増幅させ得るものに過ぎず、徳兵衛の言葉の本性を保証するものには全くなっていない。お初は泣きながら「氣強う勇」んで語る。つまり、お初も徳兵衛の言葉以外の根拠がないことを重々承知しており、その上で徳兵衛という人を信じ込んでいただけなのである。宙づり(サスペンス)作劇法とでもいべきものだが、注(8)で述べた、過去が徳兵衛の言葉の中にしかないという形式面と深く呼応するものである。お初は、徳兵衛の言葉が本当なのか嘘なのか、それを信じるか否かという局面に改めて立たされることになる。

(16)

「印判をなくした」ということは現物が無いのだからそれ自体は証明不可能なことであり、単なる言葉にすぎない。しかし、新しい印判をもって届け出さえすれば印鑑登録を変更でき、面倒なその手続きのコストからして、「印判をなくした」ということに真実味をもたせることができる。九平次は実体のない「印判をなくした」という言葉を、新たな実体(登録された印鑑)によって覆い隠した。そしてその印鑑登録を御町衆が承認し、「印判をなくした」ということが事実とされるに至った。この事実の重さをもって九平次は語ったがゆえに、御町衆や往来の人も九平次の言葉を信じたのである。